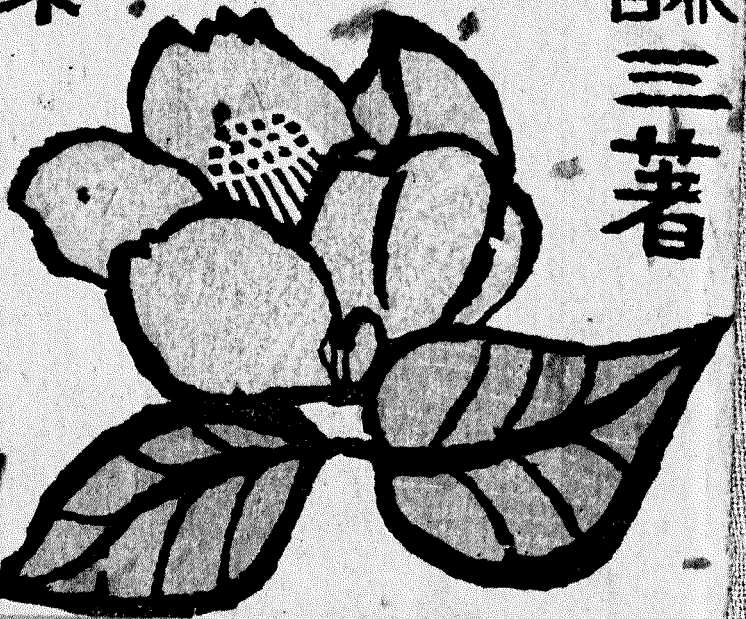
宮の椿

連詩集

一戸謙三著



連詩集

椿の宮

一戸謙三

序詩

はしたちてあめつらぬきつ

はがらざるつばさのみどり

ばらはれてしづくをれもつ

はじめのひすずにこもれり

秋風の碑

門とぎす白菊の花
ぞめなく夕をひらけ
散れる世はまた止めまじ
父のこゑ月にあらはる

過ぎし道かすかにけぶれ
澄む顔に空はうつりぬ
砂指を去りて跡なし
すがしさを立てる碑（ひ）

啼ける鳥こだまに去れり

ながぜられ廿法れゆく雲

慰めよ廿落葉は朱(あか)し

七き父は秋風にあり

たよられて廿秋に声あり

放かくてさらされし身か

たたずめば空かすかなり

珠いだきて秋に立たむ

乱れ萩

はかなり敷石の雨

葉洩れ日竹簾を透かす目

厝手紙にうつさむ

雲梢をわかれ散らむ

仄かに池めぐれるひと

笹竹数戸こもれる音

ささやく襟あし匂はし

微笑とざして時雨れし

ひそしく風だよふ庭
ひとりの指影に語れ
針もつひと泣き伏す様
ひらける夢萩に乱れ

桑の葉のこゑに月立つ
清らの眉冴ゆるうつつ
君が櫛露に折れなむ
樹さかさまに影を呼びつ

終りの虫橋は暗し
帶しみじみ頬にふれむ
とことはに水の音編む
とどまれよ風袂をとざし

かひなの色胸に沈みて
かたちは襖に艶立つ
蚊帳のゆれの想ひ絶ちて
今宵をとかり虹立つ

やらはれ

いざなひくもをばせめたり
いづくにうつれるひなるか
いさをしむなしくもえはつ
いそゆきからすをとばせり

よしなきえにしにみをさく
よるべもはてなくさかれり
よきことすべてはのこらじ
よみがをはなくかへらむ

ねむりはつばさにきたらず

ねむりはあかねにたそまりぬ

ねむりはいばらをさまよふ

ねむりはあわだちもえたり

やすみもあらざるごふくよ

やまざるいかりよしづまれ

やすらひただよふくもみよ

やらはれはたてにさらされ

東

あさのてにひらけるひがし
あめつちにつらなるひかり
あたらしきことばのきざし
あたきみづごころひたせり

いけわたりそよぐあこがれ
いなのめのもすそただよふ
いつくしくみちたちのぼれ
いのちみちたまはかがよふ

椿の宮

遠ざかるうつつのしたり
とばり透きかがよふとともし
とことはに薫ずるえにし
年また年ごとのは絶えぬ

かざせる雲招げるひかり
神の御座空のしるし
照るまことをかざれる身よ
手に手に葛を編み立つ

満てよ魂渚に返れ
道しろく空と刻めり
御酒ただたり言葉あたし
御柱めぐりをとめあり

うつし国をひらくみどり
海はさやぎ招ぐ姫神
柏手に現れ珠は紅し
茨き雲の果てし刈ぎり

七つの花に立てる虹

洲加琴にかぎろふさぎり

御空うけて透れるこえ

嶺に坐し枚たむひかり

凄しいざなふ常世のかげ

水沼にひせ夫る星あり

御空よぎる鵠のあと

宮椿のざり現れたむ

ララ加友

かひなけむ鏡のゆかり
傾けるラフフのなかれ
かざられし剣のあかり
輝きてあらむあとづれ

いざなひの鵠のひかり
むらがれる冠(かむり)はあをし
いみじかる柱くゆれり
むすぼれし環(たまき)のかざし

泥と火

踏む花よ沈める寺よ
冬よ幸福よあはれや
再び見む傷よ悔よ
船よさて立てる火山よ

哀しみカシオペアに落つ
門の暗に土軋れり
形を解き一に返せ
裏ゆ五体なかり石と語る

あざむかれて柩あをし
茸に焚けばとどろく雲
散るすがたを水さとさず
血よ若れとぎせる牧心り

どよめく岬のはてしよ
磯に見し年のしたたり
泥と火いかんぞ生きんや
いざ行かむ星よ泡立て

跋文

故福士幸次郎氏に師事し、大正八年夏のころから詩作を始めて、いつしか四十年も立つたのである。その間、昭和十三年からは断続して約三百章の連を作つてきた。昨年そのうち百二十八章を、連詩集『現身』として編んでみたが、いまだそのままにしてある。

『椿の宮』を上梓するにあたり、その詩集の昭和十三年から十六年までの中から二十九章を選んだ。そして昭和十年の津軽方言詩集『ねぷた』、昭和二十年の詩集『歴年』それから、この連詩集となつたわけである。

正統詩そして連とは何か、については今は説かない。それは、この詩集を読まれるあなたの鑑賞に待ちたい。からである。

昭和三十四年四月

著者

連詩集　椿の宮

限定五十部の内

特製二十五部

並製二十五部

これは並製

二十五部内

第　番

誤字　訂正

序詩　三行　にもつ　たもつ

やうほん三頁二行　たまりぬ　つまりぬ

椿の宮四頁三行　抱つ手　抱つ手

〃　六頁四行　椿のさり　かぶり

泥と火　一頁四行　立てる　立てる

跋文　右頁終行　たの　々の

左頁終行　、鑑賞に待ちたい　から々もあった

これ萩　頁、行　にかなり　はかない

六り　ほ　ほんを　袖を　とざ

著者　與附　一戸謙三
彫・摺・装幀・造本
発行者　蘭繁之
昭和三十四年五月一日発行
発行処　弘前市茶畑新割町二
緑の笛豆本の会